# CIEN AÑOS DE SOLEDAD

*G. García Márquez*

新潮・現代世界の文学

# 百年の孤独

G・ガルシア=マルケス

鼓　直 訳

新潮社

CIEN AÑOS DE SOLEDAD
By G. García Márquez
Original Copyright: Editorial Sudamericana, S.A.
This book is published in Japan by arrangement
with Agencia Literaria Carmen Balcells through Orion Press, Tokyo.

百年の孤独

G. ガルシア＝マルケス 鼓 直 訳

発 行 1972.5.10 9 刷 1981.3.5
発行者 佐藤亮一
発行所 新潮社 郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-803
電 話 業務部(03)266-5111 編集部(03)266-5411
定 価 1500円
印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 神田加藤製本株式会社
©1972 Tadashi Tsuzumi, Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

# 百年の孤独

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

ホミ・ガルシア・アスコーと
マリア・ルイサ・エリオに捧げる

長い歳月がすぎて銃殺隊の前に立つはめになったとき、おそらくアウレリャーノ・ブエンディーア大佐は、父親に連れられて初めて氷を見にいった、遠い昔のあの午後を思い出したにちがいない。

そのころのマコンドは、先史時代の怪獣の卵のようにすべすべした、白く大きな石がごろごろしている瀬を澄んだ水がいきおいよく落ちていく川のほとりに、竹と泥づくりの家が二十軒ほど建っているだけの小さな村だった。ようやく開けそめた新天地だったから、まだ名前のない物がたくさんあって、そういう物がたがいの話のなかに出てくると、みんなは、いちいちそれを指さなければならなかった。また毎年三月になると、ぼろを着たジプシーの一家が村の近くにテントを張り、にぎやかに笛や太鼓を鳴らして新しい品物の到来を触れて歩いたものだった。最初のころに持ち込まれたものの一つに磁石がある。手だけが雀の足のようにほっそりした髭っ面の大男で、メルキアデスと名のるジプシーが、彼の言葉を信ずればマケドニアの発明な錬金術師の手になるという世にも不思議なそのしろものを、実に荒っぽいやりくちで披露した。家から家へ二本の鉄の棒をひきずって歩いたのだ。すると、そこらの手鍋や平鍋、火掻き棒や焜炉がもとあった場所からころがり落ち、抜け出ようとして必死にもがく釘やねじのために材木は悲鳴をあげ、昔なくなった品物までが、それもいちばん念入りに捜したはずの隅っこから姿をあらわして、てんでに這うようにしてメルキアデスの魔法の鉄棒のあとを追った。それを見た村の者が唖然としていると、ジプシーはだみ声を張りあげて言った。「物にも命がある。問題は、その魂をどうやってゆさぶり起すかだ」自然の知慮をはるかに越え、奇蹟や魔法すら遠く及ばないとてつもない空想力の持主だったホセ・アルカディオ・ブエンディーアは、無用の長物めいたこの道具も地下から金を掘り出すためになら使えるのではないか、と考えた。「いや、そいつはとても無理だ」正直者のメルキアデスはそう忠告した。ところが、そのころのホセ・アルカディオ・ブエンディーアは、正直なジプシーがいるなどとは思ってもいなかったので、自分の騾馬のほかに数匹の仔山羊を添えて二本の棒磁石と交換した。妻のウルスラ・イグアランはこの仔山羊をあてにして傾いた家の暮し向きをどうにかする気でいたが、その言葉も彼を思い止まらせることはできなかった。「いいじゃないか。この家にはいりきらないほどの金が、明日にもわしらのも

のになるんだ」これが夫の返事だった。何カ月ものあいだ、彼は自分の推測の当っていることを証明しようとして夢中になった。メルキアデスから教えられた呪文を声高くとなえながら、二本の鉄の棒をひきずってその辺一帯をくまなく、川の底まで探って歩いた。ところが、そうまでして掘り出すことのできたものはわずかに、漆喰で固めたようにどこもかしこも錆びついて、小石の詰ったひょうたんそっくりの虚ろな音がする、十五世紀ごろの出来の甲冑にすぎなかった。ホセ・アルカディオ・ブエンディーアと四人の男がそれをばらしてみると、女の髪をおさめた銅のロケットを頸にかけて白骨と化した遺体が中からあらわれた。

ふたたび三月になり、ジプシーたちが舞い戻ってきた。今度は一台の望遠鏡と、太鼓ほどの大きさの一枚のレンズを持ち込んだ彼らは、アムステルダムのユダヤ人の新発明とうたってそれらの品物を公開した。仲間の女を村のはずれに立たせ、望遠鏡をテントの入口にすえた。村人たちが五レアルのお金を払ってそれをのぞくと、本当に手の届きそうなところに女の姿があった。メルキアデスは吹聴した。「科学のおかげで距離なんてものは消えた。人間が地上のすべての出来事を、居ながらにして知ることができるようになるのも、そんなに遠いことじゃない」また、巨大なレンズを使った驚くべき実験が、焼けつくような陽射しの正午をえらんで行われた。通りの中ほどに枯草をやまと積んでから、太陽光線を集めてそれに火をつけてみせたのだ。例の磁石の一件で快々として楽しまなかったホセ・アルカディオ・ブエンディーアは、これを兵器に仕立てることを思いついた。今度も、メルキアデスは彼を引き止めにかかったが、結局、レンズと引きかえに、二本の磁石の棒と植民地時代の古い金貨三枚を受け取ることになった。ウルスラは泣いた。実はその金貨は、彼女の父親が苦しい中から一生かかって貯め、彼女自身がいざという時の用意に、箱に入れてベッドの下に埋めておいたものの一部だったのだ。そんな彼女にやさしい言葉ひとつかけないで、ホセ・アルカディオ・ブエンディーアは軍事上の実験に没頭した。科学者にふさわしい献身ぶりを見せ、生命の危険さえかえりみなかった。敵の軍隊に及ぼすレンズの効果をはかるために、焦点を結んだ太陽光線にわざわざ体をさらし、くずれて容易になおらぬほどの火傷を負った。この危険な発明ごっこに驚いて文句をいう妻のその目の前で、火事を出しかけたことさえあった。何時間も部屋にこもって新兵器の性能について計算をくり返し、やがて、教育という見地からみて驚嘆に値する明確さにつらぬかれ、有無をいわさぬ説得力をそなえた一冊の提要を書きあげた。彼は、自分で行なった実験にもとづく多数の証拠品と数枚の図解をそれに添えて、飛脚に託して当局まで差し出した。飛脚は山越えをしたり、深い沼地にわけ入ったり、急流を溯ったり、また襲いかかる野獣や絶望や悪疫のために一命を失いかけたりしたあげく、やっと駅馬と連絡する道までたどり着いた。

つまり、当時はまだ首府への旅行はほとんど不可能に近い状態だったが、軍関係者の前で新兵器を実地に公開し、太陽戦争の複雑な技術を手ずから教えるためならば、政府からの命令が届きしだいそちらへ出向いてもよいとさえ、ホセ・アルカディオ・ブエンディーアは書き送っていた。何年も返事を待った。とうとうしびれを切らして、その創意もみじめな失敗に終ったことをメルキアデスの前で嘆いた。するとジプシーは、その誠実さをはっきり証明するように、レンズと引きかえに金貨を返してくれたばかりか、数枚のポルトガル渡来の地図と若干の航海用の器具をゆずってくれた。さらに、天文観測儀や羅針盤や六分儀などが扱えるようにと言って、自分で筆をとってヘルマン師（ライヒナウのヘルマン。ドイツの歴史家。一〇一三―一五四）の研究をまとめたもの――これがまた厖大なものだった――を渡してくれた。ホセ・アルカディオ・ブエンディーアは、誰にも実験の邪魔をされないように奥にもうけた狭い一室にこもって、長い雨期をすごした。家の仕事からはまったく手を引いて、天体の運行を観測するために中庭で徹夜をし、正午をはかる精密な方法をきわめようとして日射病で倒れかけたりした。やがて器具の扱いに慣れた彼は、空間というものをはっきり理解し、自室を離れるまでもなく未知の大海原で船をあやつり、人煙まれな土地を訪れ、すばらしい生きものと交わることができるようになった。そしてそのころから、ウルスラと子供たちが畑でバナナや里芋、タピオカや山芋、南瓜や茄子の手入れに汗水たらしているというのに、ぶつぶつ独りごとを言ったり、誰とも口をきかないで家の中をうろうろする癖が始まった。突然、なんの前触れもなく、それまでの熱に浮かされたような彼の仕事ぶりがやんで、一種の陶酔状態がそれにとってかわったのだ。数日のあいだ物に憑かれたようになって、自分の頭が信じられないのか、途方もない推理の結果をひとり呟いていることがあった。ついに十二月のある火曜日の昼飯どき、彼はその胸につかえていたことを一気に吐きだした。おそらく子供たちは、テーブルの上座にすわった父親が長いあいだの不眠と、たかぶる空想にやつれた熱っぽい体を震わせながら、彼のいわゆる新発見とやらを打ち明けたさいの、あの厳粛きわまりない面持を生涯忘れなかったにちがいない。

「地球はな、いいかみんな、オレンジのように円いんだぞ！」

たまりかねてウルスラが叫んだ。「気違いは、あんただけでたくさんよ。ジプシーじゃあるまいし、この子たちにまで変なことを吹き込まないで！」腹立ちまぎれに床に投げて天文観測儀をこわしてしまった妻のすさまじい形相にひるむ様子もなく、ホセ・アルカディオ・ブエンディーアは泰然自若としていた。彼はべつに一台こしらえて村の男たちを自室に呼びあつめ、みんなには納得のいかない理屈を並べて、東へ、東へと航海すればかならず出発点に帰りつくはずだ、と説いた。ホセ・アルカディオ・ブエンディ

ーアもとうとう気が狂った、村人たちがそう思いはじめたころである。折よくメルキアデスが戻ってきて、うまく事をおさめてくれた。マコンドでこそ知られていないがとっくに証明ずみの理論を、ただ天文学上の観想によって生み出したこの男の頭脳のすばらしさを一同の前で褒めそやし、さらに称賛のしるしとして、それ以後の村の運命に多大の影響を与えることになるものを、錬金術の工房を彼に贈ったのだ。

実はそのころまでに、メルキアデスは恐るべき速さで老い込んでしまっていた。村を訪れた最初のころは、どう見てもホセ・アルカディオ・ブエンディーアと同年輩としか思えなかった。ところが、このホセ・アルカディオ・ブエンディーアが人並みはずれた体力をいつまでも保っていて、今でさえ耳をつかんで馬を引き倒すことができるという有様なのに、ジプシーのほうは頑固な持病で苦しんでいるのがありありとわかった。実はそれは、度かさなる世界一周の旅の途中でかかったさまざまな奇病のせいだった。実験室を建てるさいに、彼が自分の口からホセ・アルカディオ・ブエンディーアに語ったところによると、死神は彼をつけまわし、しきりに身辺をうかがっているが、ただ、最後の止めを刺す気にはまだなっていないだけのことだった。彼は、人類を襲ったあらゆる悪疫と災厄をからくも逃れてきた男だった。ペルシャの玉蜀黍疹、マレー群島の壊血病、アレクサンドリアの癩病、日本の脚気、マダガスカルの腺ペスト、シシリアの地震、大勢の溺死者を出したマゼラン海峡での遭難などをしのいで来たのだ。その言葉を信じるならばノストラダムス（フランスの星占術師。一五〇三―六六）の秘法を心得ているというこの不思議な人物は、事物の背後の世界をかいま見たとしか思えない東洋人ふうの目つきをし、身辺につねに暗い雰囲気をただよわせた陰気な男だった。羽根をひろげた鴉にそっくりな大きな黒い帽子をかぶり、着古して青かびの吹いたようなビロードのチョッキを羽織っていた。しかし、その該博な知識と神秘的な風貌にもかかわらず、彼にも地上の存在という条件、人間としての重荷は絶えずつきまとって、日常生活の些細な事柄に彼をかかずらわすことになった。老人特有の病気に苦しめられた。わずかな金銭の不足に悩み、壊血病で抜けた歯のせいで長いあいだ笑いを忘れていた。暑さの耐えがたい日盛りにこの秘密を打ち明けられたホセ・アルカディオ・ブエンディーアは、今こそ偉大な友情は始まったと、そのとき堅く信じた。子供たちもまた、空想ゆたかな彼の物語のとりこになった。ギラギラと窓から射し込む光線をまともに受けて腰をおろし、暑さで溶けた脂がひたいを流れるのもかまわず、オルガンのように深味のある声で闇に包まれた想像の世界について語り、それを明るみに出していくあの日の午後の姿を、当時はまだ五歳にもなっていなかったアウレリャーノだが、死ぬまで覚えていたことだろう。兄のホセ・アルカディオにしても、代々ひき継ぐべき思い出として、子孫のすべて



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

にあの嘆賞すべき姿を語り伝えるつもりだったにちがいない。ところがウルスラには、この客人はいやな記憶しか残していかなかった。メルキアデスがうっかりして塩化第二水銀のフラスコを割ったその瞬間に、彼女が部屋へはいって行ったためだ。

「まるで悪魔の臭いね」と彼女は呟いた。

それを聞きとがめてメルキアデスが言った。

「とんでもない。悪魔が硫黄質だってことはとっくに証明ずみだよ。ところがこれは、ここにあるのは、ほんのわずかな量の昇汞だ」

いつも教化ということを忘れない彼は、さっそく辰砂の悪魔的性質についての博識ぶりを披露しはじめたが、ウルスラのほうはそれに耳を貸そうともしないで、子供たちを連れてお祈りに出かけて行った。あの鼻を刺す異臭はメルキアデスの思い出と結びついて、いつまでも彼女の記憶に残っていたに違いない。

お粗末な実験室は、たくさんの土鍋、漏斗、レトルト、濾過器、水こしなどを別にすると、原始的な窯、首の細いガラスの試験管、〈哲学者の卵〉（錬金術の炉中で用いたガラス製のフラスコ）のまがいもの、そしてユダヤ婦人マリア（実在した最古の錬金術師）の三本腕のランビキの新しい仕様にもとづいてジプシーたちがこしらえた蒸溜器から成りたっていた。これらの器具のほかにメルキアデスは、七つの星にそれぞれ振りあてられた金属の見本、モーゼとゾシモス（パノポリスのゾシモス。四世紀ごろの錬金術師。）から伝わる金を倍加する方法、さらに、それを解くことのできる者がいれば賢者の石（卑金属を貴金属に変成する力をもつと信じられた霊石）の調製も可能だという霊液エリクサの処方についての一連のメモや絵図面を残していった。中でも金を倍加する方法のたやすさに惹かれたホセ・アルカディオ・ブエンディーアは、何週間もうるさくウルスラにつきまとって、例の植民地時代の金貨を掘らしてくれ、いくらでも細かく分けられる水銀と同じようにそいつを倍にふやしてみせるから、と頼み込んだ。毎度のことだが、絶対にあきらめない夫のねばりにウルスラは負けた。するとホセ・アルカディオ・ブエンディーアは、三十枚の金貨を鍋に放りこんで、そこへ銅や鶏冠石、硫黄や鉛などのやすり屑をまぜてどろどろに溶かした。そして、それをそっくり蓖麻子油（卵を蒸溜して三番めに得られる黒がかった黄緑色の液体）入りの釜に移して強火で煮立て、みごとな黄金よりはどう見てもありふれた飴としか思えない、どろりとした、臭いシロップ状のものを取り出した。危険ばかり多くて見込みのうすい蒸溜作業の中で、七つの星を表わしている金属とまぜて溶解したり、錬金術には欠かせない水銀とキプロス産の硫酸で処理したり、大根の油（卵を蒸溜して二番めに得られる薄い金色の液体）がないのでラードでくり返し煮立てたりしているうちに、ウルスラの貴重な財産は、すっかり焦げついて釜の底からひきはがすこともできない炭に化けてしまった。

ジプシーたちが舞い戻ってきたころには、ウルスラにそそのかされた村人たちは彼らに反感を抱くようになってい

た。しかし、恐怖はついに好奇心の敵ではなかった。このたびのジプシーが耳も聾せんばかりにありとあらゆる楽器を打ち鳴らして村をまわり、同時に呼び込みの男を使って、ナチアンツ（古代小アジアのカパドキア地方の町）の人びとの驚異的な発見を披露すると宣伝したからだった。そういうわけで、村じゅうの者がテントまで出かけて行き、一センターボのお金を払って中をのぞくと、歯がぴかぴか光る新しいものに変り、皺も消えて、もとに返った若々しいメルキアデスがそこに立っていた。壊血病で駄目になった歯やたるんだ頬、色つやの悪い唇などを記憶していた村人たちは、このジプシーの超自然的な力をまざまざと見せつけられて恐れおののいた。メルキアデスが歯ぐきにはめ込まれた歯をそっくりはずし――つかの間、彼は昔の老いさらばえた男に返った――、それをちらと一同に見せてからふたたび歯ぐきにはめ、よみがえった若さを十二分に意識したにこやかな表情に戻ったとき、単なる恐れは畏怖の念に変っていた。ホセ・アルカディオ・ブエンディーアでさえも、ついにメルキアデスの知識は異論をさしはさむ余地のないその極限に達したと思ったが、あとで二人きりになったジプシーの口からこっそり義歯のからくりを教えられて、内心ほっとした。簡単だがすばらしいこのからくりに心を奪われて、彼は錬金術に対する関心を一夜のうちに失ってしまった。ふたたび不機嫌な状態に落ちいって、食事も不規則になり、一日じゅう家の中をうろうろした。「今の世界では、信じられないようなことがいろいろ起っているらしい」とウルスラをつかまえては言った。「わしらはこうして驢馬なみの生活をしているが、つい鼻の先の、あの川の向うには、いろんな不思議なものがあるんだ」マコンドの村が建てられたころから彼を知っている連中は、メルキアデスの感化で彼の人柄がすっかり変ってしまったことに、今さらのように驚いた。

最初のころのホセ・アルカディオ・ブエンディーアはいわば若き族長として振舞い、種まきの指図をしたり、子供の養育や家畜の飼育について助言したり、村の発展のためならば肉体労働までふくめて、一同への協力を惜しまなかった。当初から彼の家は村いちばんの住居だったので、ほかの家々はそれにならって建てられた。採光のよい広々とした客間、明るい色の花で飾られたテラスふうの食堂、栗の大木がそびえている中庭、手入れのよい野菜畑、山羊や豚や鶏が仲よく暮している裏庭などがそこにはそろっていた。ただ一つ、彼の家だけでなく村全体で飼うことを禁じられている家畜があった。それは軍鶏（しゃも）だった。

ウルスラの勤勉さも夫のそれに負けなかった。小柄だが働き者で、まじめ一点ばり、生きているうち歌など一度も口にしたことのないこの気丈な女は、いつも更紗（さらさ）のスカートのかすかな衣ずれの音を残しながら、明け方から夜更けまで休むことなく動きまわった。彼女がいるおかげで、土を突き固めただけの床や、石灰の塗られていない土塀や、

手づくりの木製の家具などはいつも清潔だったし、時代物の衣裳箱はむせるようなめぼうきの匂いを放っていた。

この村でも二度と見られないのではないかと思うくらい進取の気性に富んだホセ・アルカディオ・ブエンディーアは、どの家からも同じ労力で川まで行って水汲みができるように家々の配置をきめ、さらに、日盛りにほかの家よりよけいに陽があたる家が出ないように考えて通りの方向を定めた。数年のうちにマコンドは、当時知られていた、住民三百を数えるどの村よりもきちんと整った勤勉な村になっていた。そこは、本当に幸福な村だった。三十歳を越えた者は一人もなく、死人の出たためしもなかったのである。

村が建てられたころから、ホセ・アルカディオ・ブエンディーアはせっせと罠や鳥籠をこしらえた。またたく間に、彼の家だけでなく村じゅうがよしきりやカナリア、はちくいどりやこまどりであふれてしまった。雑多な小鳥の合唱があまり騒々しくて頭が変になりそうなので、ウルスラなどは耳に蠟を詰めて現実の感覚が失われるのを防いだほどだった。メルキアデスの一族が初めてやって来て頭痛に効くというガラス玉を売り歩いたときも、村のみんなは、もの憂い沼地のかげに隠れたここがよく見つかったものだと驚いたが、あとでジプシーたちの話を聞くと、実は彼らも小鳥の声をたよりに道を進んだという話だった。

しかし、率先して社会に奉仕するというこの心がまえも、磁石熱や天文学上の計算、物質変成の夢やさまざまな世界の不思議を見たいという願望に引きまわされて、あっさり消えてしまった。てきぱきしていて身ぎれいだったホセ・アルカディオ・ブエンディーアが、ぐうたらな身なりをかまわない人間に変ってしまった。不精ひげまで生やすようになったので、ウルスラは台所の庖丁を持ち出して、苦労してそれを剃ってやらなければならなかった。彼には呪いがかかっているのだ、と思う者まで出はじめた。そのくせ、マコンドをすばらしい文明の利器と接触させる道をひらくためだと言って、彼がすすんで山刀や斧をにない、その上でみんなの協力を求めたとき、仕事も家族もなげうって彼につき従ったのは、ほかでもない、その狂気を信じて疑わなかった当の男たちだった。

ホセ・アルカディオ・ブエンディーアもこの辺一帯の地理についてはまったく不案内だった。彼の知っていることといえば、東に嶮しい山脈がつらなり、さらにその向うに、彼には祖父にあたる初代のアウレリャーノ・ブエンディーアに聞いた話だが、かつてフランシス・ドレイク卿（イギリスの提督。?―一五九六）が大砲で鰐狩りに興じ、そのあと皮をつくろい藁を詰めてエリザベス女王に献上したところだという古都、リオアーチャ（コロンビアのラ・グアヒラ州の海港）があるということくらいだった。実はまだ若かったころ、彼とその一行の男たちは女子供や家畜を引きつれ、家具什器のたぐいを洗いざらいかかえて、海への出口を求めて山越えをはかったことがあるのだが、さすがに二年と四カ月めにはこの難事業をあきら

めざるを得なかった。そして、帰途につく労をはぶくためにマコンドの村を建てたのだった。従って、それは彼を過去へと引き戻すだけの道なので、彼にとっては問題外だった。南方には、切れ目のない乳皮のような緑でおおわれた沼と、ジプシーたちの話では行けども行けども果てしのない、茫漠とした湿原が続いていた。しかも、その広大な湿原は西のほうで目路はるかな大海原と一つになっていて、そこには、女の顔と胸をもち、とてつもなく大きな乳房で水夫らをたぶらかし破滅へと誘う、なめらかな肌の鯨が群れているということだった。ジプシーたちもその方角に船をすすめて、半年後にやっと、駅馬のかよう細長い陸地にたどり着いたにすぎないという。ホセ・アルカディオ・ブエンディーアの推測によると、文明世界との接触の可能性は北方への道にしか残されていなかった。そこで彼は、ともにマコンドを建設した男たちに山刀や斧、狩猟の道具などを持たせ、使いなれた方位測定用の器具や地図を雑のう一つに放り込んで、大胆きわまりない冒険の旅に出たのだった。

初めの何日かは、これといった障害に出くわすこともなかった。彼らは岩だらけの川岸に沿って数年前に戦士の甲冑が発見された場所まで下り、そこから森にはいって、野生のオレンジにふちどられた狭い道をたどった。一週間めに鹿を射止めて焙り肉にしたが、明日からのことを考えてその半分だけを食べ、残りは塩漬にした。彼らはこうした用心をすることで、屁をかがされたようにいやな味のする、青みがかった金剛いんこの肉を口にしなければならなくなる日を、少しでも先へのばそうとしたのだった。やがて十日以上も陽の目をおがめない日が続いた。水気をたっぷり含んだ地面は火山灰のようにぶよぶよし、草木はますます油断のならないものになり、小鳥や猿のけたたましい叫びもしだいに遠のいて、限りなく広がる陰鬱な世界が始まった。原罪以前にさかのぼるこの湿気と沈黙の楽園で、一行の者たちは遠い過去の記憶に悩まされた。煙の立ちのぼる油のたまりに履物をとられ、血のように鮮やかなあやめの花や金色のやもりの胴を山刀ではねなければならなかった。まる一週間というもの、彼らはわずかに発光性の虫の淡い灯をたよりに、息苦しいほどの血の臭いにあえぎながら、ほとんど口をきくこともなく夢遊病者のように悪夢の世界をさまよった。せっかく切り開いた道もみるみる伸びていく新しい植物でたちまち閉ざされてしまうので、もはや引き返すことも不可能だった。「気にすることはない」とホセ・アルカディオ・ブエンディーアは言った。「方角さえ見失わなければ、それでいいんだ」彼は磁石だけをたよりに見えない北へ向って一行を誘導し、ついに魔の土地からの脱出に成功した。それは星ひとつない暗い夜だったが、その闇は澄みきった、さわやかな大気でみちあふれていた。長途の旅で疲れきっていた一行はその場にハンモックを吊って、二週間このかた初めて深い眠りについた。目

がさめたとき――陽はすでに高く昇っていた――彼らは驚きのあまり呆然となった。その目の前に、羊歯や椰子の木にかこまれ、おだやかな朝の光を浴びて、スペインの巨大な帆船が白くぼんやりと横たわっていたのだ。わずかに傾いた船の無傷のマストから、薄汚れた帆の切れっぱしが蘭の花で飾られた船具のあたりまで垂れ下っていた。小判ざめの化石と柔らかい苔のなめらかな装甲でおおわれた船体は、石ころだらけの地面にがっしりと喰い込んでいた。船の全体が、時の悪意と小鳥のよからぬ習性から守られた独自の場所を、孤独と忘却の空間を占めているように思われた。ひそかな欲望に駆られた一行の男たちが探ってみたが、船内はただ草花で埋めつくされていただけだった。

海の近いことを示すこの帆船の発見で、ホセ・アルカディオ・ブエンディーアの気力は尽きてしまった。かつて数かぎりない犠牲をはらい、かずかずの苦難に耐えて海を求めたさいには発見に失敗しながら、求めてもいない今になってそれに遭遇したこと、しかもそれが越えがたい障害として前途に横たわっているという事実、それを彼は、邪悪な運命のいたずらだと考えたのだった。それから長い歳月がすぎて、すでにそこが正規の駅路となったころに、アウレリャーノ・ブエンディーア大佐がふたたびこの地方を通過したことがあったが、彼がそこに見たものは、ひなげしの野原に取り残された帆船の黒焦げの肋材にすぎなかった。しかしそれで初めて、あの話が父親の単なる空想の産物でないことを知った彼は、どうやってこんな奥地まで帆船がはいり込めたのかと、あらためて不思議に思ったものだった。しかし、さらに四日間の旅を続けて、帆船から十二キロの地点で海に出たときのホセ・アルカディオ・ブエンディーアは、そのような不審を抱くどころではなかった。遠征にともなった危険と犠牲にふさわしくない、白波たつ薄汚れた灰色の海を前にしたとたんに、夢はあとかたもなく消えてしまった。

「なんだ！」と彼は叫んだ。「マコンドは、海に囲まれているのか！」

ホセ・アルカディオ・ブエンディーアが遠征から帰って描いた独断的な地図に始まるのだが、マコンドは半島であるという考えは、かなり長いあいだ正しいとされていた。この土地をえらんだ自分の勘の悪さをみずから罰するつもりで、彼は交通の不便をことさら誇張して、いっきに地図を書き上げたのだ。「わしらは絶対に、どこへも行けそうにないぞ」と彼はウルスラをつかまえては愚痴った。「科学の恩恵にもあずからずに、ここでこのまま朽ち果てることになりそうだ」かたくなにそう信じながら実験室で何カ月も考え込んでいるうちに、彼はマコンドをもっと適当な土地へ移すことを思いついた。ところが今回は、ウルスラがその熱心な計画の先まわりをした。彼女は蟻のように隠密に、辛抱づよく動きまわって、すでに移住の準備にかかっていた男たちの気まぐれに反対する決意を、村じゅうの

女に固めさせたのだ。ホセ・アルカディオ・ブエンディーアには、いつごろから、またどのような悪意にみちた力のせいで、その計画がさまざまな口実や故障や言いのがれの網の目にからまって単なる夢と化していったのか、さっぱり見当がつきかねた。ウルスラはさりげなく夫の様子をうかがっていたが、奥の部屋で夢のような移住の計画をぶつぶつ呟きながら、奇妙な箱のなかに実験室の器具を詰めているのを見た朝は、さすがに彼が気の毒になった。彼女は、夫がその仕事を終えるのを待った。箱を釘づけにし、墨をふくませた刷毛でその上に自分の頭文字を書くのを黙って見ているだけで、別にとがめようともしなかった。しかし、それはあくまでも、村の男たちがその計画に従わないだろうということを彼自身も知っている――小声でそう呟いているのが彼女の耳にはいった――と心得た上のことだった。夫が部屋のドアをはずしにかかったとき、初めてウルスラは思いきって、なぜそんなことをするのか、と尋ねた。すると、いかにも淋しそうな夫の返事がかえってきた。「誰にも行く気はないらしい。わしらだけでも出かけるか」ウルスラは顔色ひとつ変えないでそれにこたえた。

「出かけはしませんよ。この土地に残ります。ここで子供まで産んだんですからね」

「まだ死んだ者はいないじゃないか」と彼は言った。「死人を土の下に埋めないうちは、どこの土地の人間というわけにはいかんのだ」

おだやかだが堅い決意のこもった声でウルスラはやり返した。

「ここに残りたけりゃ死ね、というのなら、ほんとに死んでみせてもいいわよ！」

ホセ・アルカディオ・ブエンディーアは妻の意志がそれほど強いとは思っていなかった。地面に魔法の液をまくだけで思いどおりに作物がみのり、苦痛を消すためのあらゆる器具がただ同然の値段で手にはいる不思議な土地を約束するなど、空想の魔力に訴えて気を惹こうとした。だが、ウルスラは夫の先見の明というやつを信じなかった。

「気違いじゃあるまいし、おかしなことばかり考えるのはやめて、少しは子供たちの面倒でもみたらどうなの」と彼女は答えた。「あれを見てよ。放ったらかしにされて、あれじゃまるで驢馬だわ」

ホセ・アルカディオ・ブエンディーアは妻の言葉をまともに受けとめた。窓の外に視線をやると、日なたの野菜畑を駆けまわっている子供たちの姿が目に映ったが、それが彼には、ウルスラの呪文によってその胎内にやどった子供たちが、まさにこの瞬間から地上に存在し始めたのだという印象を与えた。そのとき、彼の内部で何かが起った。神秘的でしかも決定的なその何かは、現在という時間から彼を根こぎにして、まだ足を踏み入れたことのない記憶の世界のあてどない旅へと彼を誘った。これから先も離れることがないとわかった家の中をウルスラが掃除している間、



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo